

スコットランドとヴァイキング 的証拠による定住史の断章

地名学・考古学

著者	原 征明
雑誌名	東北学院大学論集．経済学
号	126
ページ	9-18
発行年	1994-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024425/

“スコットランドとヴァイキング” —地名学・考古学的証拠による定住史の断章*—

原 征 明

I. はしがき

いわゆる「ヴァイキング時代」(The Viking Age)において、ブリテン島のイングランドに対する主要な攻撃がデーン人 (Danes) によるものであったとするならば、本稿の対象であるスコットランド本土とその北方海上にあるシェトランド諸島 (Shetland Islands) やオークニー諸島 (Orkney Islands), および西方に位置するヘブリディーズ諸島 (Hebrides Islands) やフェロー諸島 (Faeroe Islands) などはノルウェー人により占拠・定住されたところである。

因みに彼らはここからアイルランド (Ireland) やマン島 (the Isle of Man) へと南下し、そこを拠点にウェールズ海岸地帯にも出現し、その証拠を多く残すことになるのだが、それについての検討は、別稿にゆずりたい。ともあれ、これらの地域はブリテン島のいわゆる「ケルト地域」を構成する。以下では考古学および近年の地名学的研究成果をふまえ、定住史の視点からヴァイキング期北欧人、とりわけノルウェー人のインパクトについて、その一端を明らかにするものである。

II. スコットランド本土と周辺諸島—地名学・考古学的検討—

ヴァイキングの故土としてのノルウェーは、今日でも国土の約25%が針葉樹林からなり農耕可能な面積は3%程度であるが、可耕地も海岸沿いの

*この小稿は、筆者が以前おこなった研究報告「ブリテン島とヴァイキング」(Vikings in Britain) —第12回日本ケルト学会議(金城学院大学) —のうち、スコットランドのみを扱い今回それに加筆したものであるが、論旨に基本的変更はない。

細長な地帯で、そのほとんどが南部であった。因みにヴァイキング時代には、せいぜい夏期に山岳地帯の牧草地での放牧、低地においての半農半漁という生活が概ねその特徴をなしていたと思われる。

従ってノルウェー系ヴァイキングの動向は、本質的に最初から新たな土地を求めての「移住」ないし「植民」をその特徴とし、シェトランド諸島・オークニー諸島・ヘブリディーズ諸島などへの侵入と占拠がなされたと考えてよい¹⁾。特にハーラル美髪王 (ca. 860-933) による専制的な権力の増大を契機とし、またノルウェーの統一後には更に多くのノルウェー人たちがその故地を離れ874年以降アイスランド (860年発見) に移住したのである。

ところで、このような古ノルウェー人の移動・定住などの動向に関しては、中世アイスランドの歴史書である『植民の書』(Landnámabók)や『オークニー・サガ』(Orkneyinga Saga), 『ヘイムスクリングラ』(Heimskringlar), 『ハコナル・サガ』(Hákonar Saga)があつて例えば11-13世紀のヘブリディーズ諸島の住民のことなどに関して示唆をあたえてはいえる。しかし当面するヴァイキング時代の政治史上の主要なアウトラインの構築に関しては、これら「記録された史料」(written sources)さえも不

1) A. W. Brøgger, *Oler Norske bosetningen på Shetland-Orknøene* (Oslo, 1930), pp. 7-61., & H. Shetelig, *An Introduction to the Viking History of Western Europe*, pp. 5-23., Archibald R. Lewis, *The Northern Seas-Shipping and Commerce in Northern Europe, A.D. 300-1100* (Octagon Books, 1978), p. 246.

シェトランド (Shetland) 島やオークニー諸島 (Orkney Islands) は、そこからヴァイキングの略奪者達が無防備な海岸を一掃し、…その略奪品を選び去るのに有利な地点として役立ったのである。cf. Knut Gjerset, *History of the Norwegian People* (AMS reprint ed., New York, 1969), p. 46. 「その当時、これらの島々には小規模ながらケルト人居住者が存在したが、そこを掌握した北欧人たちが居住者たちを植えつけ、…(また)ヘブリディーズ島にも定住がなされた。西暦820年から830年にかけて、ヴァイキングたちが多数到来したので、この島 (=Hebrides) はアイルランドの年代記作者たちによって “Innse Gall” (即ち, the islands of strangers) と呼ばれた」云々。K. Gjerset, *ibid.*, p. 48.

十分であり、また時として誤ってさえいるように思われる²⁾。

さて、ブリテンのケルト諸地域に対するヴァイキングのインパクトとして最も有名なのは、歴史記録によれば、アイオナ島 (Iona) 島の由緒ある修道院が795年に攻撃にさらされた³⁾ ことであるが、近年の考古学的証拠

2) 例えば、アイスランド最大の歴史サガ『ヘイムスクリングラ』の説明では、「ハラル王がノルウェーを支配下におくため戦争に明け暮れていた時期、フェロー諸島やアイスランドといったよその土地に入植が行われた。シェトランド諸島への大規模な脱出行もあり、多くの貴族たちが無法者としてハラル王のもとから逃げ出した。一方でヴァイキングの西方への遠征も続けられ、彼らは冬の間オークニーやヘブリディーズ諸島にとどまり、夏になるとノルウェーを襲って多大の被害を与えた。…ハラル王はオークニーやシェトランドに対する統治権をロンヴァル伯爵に与えたが、ロンヴァルは直ぐにこれら二つの土地を兄弟のシグルトに譲った」。そしてシグルトと数人の仲間はスコットランドを荒らして、ケースネス (Caithness) —スコットランド北東部—やヘブリディーズ諸島から「エヘキルスバック川 (現在のサザーランドとロスの間を流れるオイケル川) までの土地をわがものとしていった」と。

しかし、アルムグレン (Berutil Almgren) によると、ハラル美髪王は9世紀の終わりまでノルウェーを統治下においてはなかった。従って、スカンジナビア人たちの移住に関するかぎり『ヘイムスクリングラ』の説明は誤りである、というのである。Bertil Almgren (ed.), *The Vikings* (Crescent Books, 1975), 蔵持 不三也訳『ヴァイキングの歴史』(原 書房, 1990), 93-94頁。

3) このアイオナ島 (Iona) は、南北5.5キロ、東南2.5キロの小島であるが、アイルランド王家出身の修道士聖コロンバ (Columba) が上陸し修道院を建立して以来 (563年)、アングロ・サクソン時代のブリテン島伝道の拠点となった。

因みに、聖コロンバは当時のアイルランドにおける37ヶ所に厳格な戒律を特徴とする修道院の創設に関わったのであるが、そのあり方は独居房の集合形式をとる「蜂の巣修道院」(bee-hive monastery) と断食、冷水の浸礼などの肉体的贖罪の行などに示される。ともあれ、こうしたアイオナ島と聖コロンバはその後のスコットランドやイングランド北部リンディスファーン島 (Lindisfarne) 島を拠点とするノーサンブリア王国—その首都ヨークには、ケント王国の首都カンタベリー—とともに大司教座が設置—のキリスト教化にも大なる影響を与えていくことになった。Cf. Alan Isaacs & Jennifer Monk (eds.), *The Cambridge Illustrated Dictionary of British Heritage* (Cambridge U.P., 1989), pp. 221-222. ヴァイキングは、上述のリンディスファーン修道院や、『教会史』の著者ベダが修行を積んだジャロウ修道院 (Jarrow, *Donemup*)、およびウェアマス修道院などの襲撃・破壊後、こんどはスコットランドの西海岸に来襲し、アイオナ修道院は794年に最初の破壊を被り、さらに7年後の806年には壊滅的な被害をうけた。G.N. Garmonsway (trans. & ed.), *The Anglo-Saxon Chronicle* (London, 1972), pp. 56-57.

を援用するとノルウェーからスコットランド本土およびその周辺諸島にむけて新しい植民・定住地をもとめての移動・侵入が行われたのは概ね西暦800年前後の数十年間であったように思われる。因みに、ヘブリディーズ諸島の一つであるルーズ島 (Lewis) で古代スカンジナビア人の女性人骨とともにケルト様式の装飾をほどこされた円形の青銅ブローチ、青銅バックル、青銅鎖、鉄製品、琥珀などの副葬品を有する埋葬墓が砂地の土壌で偶然に発見されたのは、1915年のことであったが⁴⁾、これまでのところ北のルーズ島から南のアラン島 (Arran) 島などにかけての地域では、考古学者や民間人の手によって30-40基ほどの埋葬墓が確認されてきている。因みに、それらの考古学的証拠が北欧人による永続的な定住に関する一定の指標になるのは、女性の埋葬墓が比較的多く発見されるからでもある。

また、考古学者たちが近年 (1956~1976) 下した結論によると、移住者たちは先住者のいない無主地の群島には到着せず、むしろ彼らはさしあたり先住のピクト人やゲール人たちが主たる生活基盤としていたところの小規模な土地—*machair*⁵⁾—に魅力を有したらしい。

かくして考古学的な視点からも、このような北方からの移動・定住の規模が一体どの程度のものであったのか、また、ヘブリディーズ諸島その他の先住民 (=ケルト人・スコット人) との遭遇は平和的であったのか、あるいは暴力的・破壊的な形をとったのかということ、更にまた、もし仮に平和的なものであったにせよ兩人種間にはその後の歴史において一体いわば

4) Per Sveas Andersen, Norse settlement in the Hebrides: what happened to the natives and what happen to the Norse immigrants?: Ian Wood & Niel Lund (eds.), *People and Places in Northern Europe 500-1600* (The Boydell Press, 1990), p.131.

5) “*machair*”とは、ゲール語で「平坦な低地にある耕作可能な地条で、主に貝殻質の砂土で、水はけのよい肥沃な土地」を意味し、概して海岸地帯に見られる。Cf. Barbara E. Crawford, *Scandinavian Scotland* (Leicester U.P., 1987), p.28 & Fig. 10 (p.29).

「統合」(integration)の過程があったのかどうか、などの興味のつきない問題を生ぜしめるにいたったのである。この点、さしあたりオークニー諸島(Orkney)を事例にとると、リッチー女史(Anna Ritchie)はピクト人と北欧人の間では少なくとも9世紀から10世紀に向けて、ある種の社会的統合が存在したことは疑いないと考えたのに対し、クロウフォード(Iain A. Crawford)の場合9世紀の北欧人の植民は急激であったし、当該地域の物質文化という点では全体として壊滅的に作用するものであったと主張するなど、見解は二分される⁶⁾のである。

そこで次に、最近の調査研究とりわけ地名学的研究によりながら見てみる。いうならば地名そのものはまさに人間の土地にたいする「支配の表象」なのであり、考古学的な証拠とともに当該諸地域に関する初期的定住の動向を研究する上で有益な材料を与えてくれるのである。それによると、一般にスコットランド本土および周辺諸島に対するヴァイキング期ノルウェー人の移住及び土地獲得は大規模なものから、例えば南ヘブリディーズ諸島における短期的かつそれ程広範でない移住まで多種多様なものである。Fig. 1で明らかなように、その移住が最も濃厚なのはシェトランド諸島⁷⁾、オークニー諸島それにスコットランド本土の北東部ケイスネス(Caithness)であるが、因みにアイスランド語の英雄叙事詩「サガ」においては、これらの地域はスカンジナビアの不可分な一部であると見なさ

6) Anna Ritchie, “Pict and Norseman in Northern Scotland” *Scottish Archaeological Forum*, VI (1974), pp. 23-36., Iain A. Crawford, “War or peace-Viking colonisation in the Northern and Western Isles of Scotland reviewed”, *English Viking Congress*, 259-270.

7) シェトランド諸島(Shetland Islands, Zetland)は、周知のようにブリテン島の最北端に位置しており、大小100余りの島々からなるが、そのうち居住地となるのは21島ほどで残りは不毛の地といわれる。メインランド、イエル(Yell)、アンスト(Unst)などが大きな島であり、スコットランド領となったのは1472年になってからのこと。それまではノルウェー領であったため、スカンジナビア系の遺跡や風習を多く残している。

れていた⁸⁾ ほどであり、ノルウェー系ヴァイキングは地名も恒久的な刻印を残すことになる。

もっとも、地名の濃さが必ずしも定住の濃密さを意味しないという論者の主張もないわけではない。しかし、この時代に関わるものとしては限られた僅かの断片的な記録史料しかないのであるから、一定の目的で土地ないし具体的場所に利用価値を見いだした際につけられる「地名の刻印」は、それ自体、考古学的証拠などと相まって当該諸地域の歴史的状況の再現に一定の視点を与えてくれるわけである。

さて、地名学者たちの一致した見解によると、スコットランド本島を含めヘブリディーズ諸島では、その語尾が *-staðir*, *-bólstaðr*, *-setr* および *-boer* (*-býr*) などがその定住と深く関わる共通した「農圃名」だということである⁹⁾ 理由は、これらがヴァイキング時代のノルウェー地方にもっとも多いからである。また、ヘブリディーズ諸島におけるヴァイキングの定住に関しては、*-staðir* 地名が最早期の農圃地名を意味し、しかもこのような農圃地名は、そのほとんどが海岸沿いに見られることから、その分布はノルウェーからの移住者の第1世代もしくは第2世代の範囲内にあるスカンジナビア系定住地を示している、とみられる¹⁰⁾。

つぎに、注目されるのは David. K. Olsen による1983年の研究である。

8) Malcom Falkus & John Gillingham (eds.), *Historical Atlas of Britain* (Granada Publishing Ltd. 1981), 中村・森岡・石井 訳『イギリス歴史地図』(東京書籍, 昭和58年), 46-47頁, および谷口幸男 訳『アイスランド サガ』(新潮社, 1979年)などを参照のこと。

9) 因みにノルウェー語では, *bol* に dwelling-place, farm, lair (小屋, 囲い, ねぐら) などの意味がある。また, *-setr* に相当するとおもわれる動詞 *setre* は, go to the summer pasture in the mountains with the cattle, or work there as a dairy maid である。

10) 筆者未見であるが, 地名学者 W. F. H. Nicolsen による研究では記録された32ヶ所の *-staðir*-settlement のうち, 三分の一はルーズ島, スカイ島, アイレイ島に分布するという。Cf., Per Sveaas Andersen, *op. cit.*, p. 138.

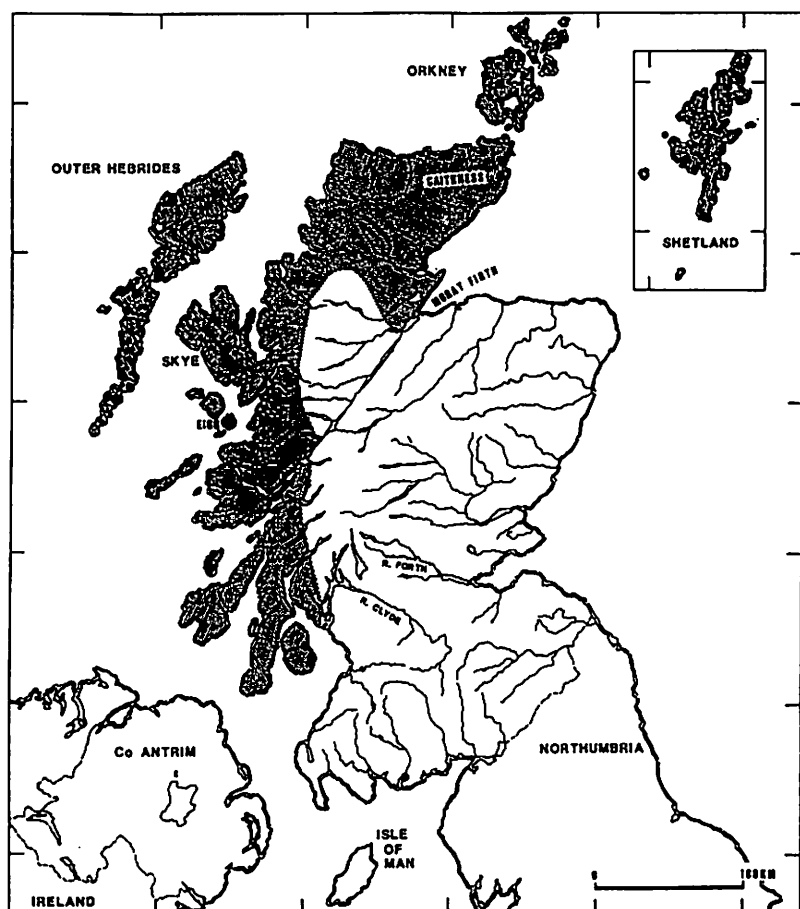


Fig. 1.

Map of Scotland showing the distribution of Scandinavian place names (stippled), Viking graves (dots) and cemeteries (ringed dots).

Anna Ritchie, *Viking Scotland* (B.T. Batsford, 1993), p.31.

彼は、ルイズ島 (Lewis)、スカイ島 (Skye)、アイレー島 (Islay)などのうちで、北欧語 (=Norse)と Gaelic-Norse 地名が重点的に集中しているような5ヶ所を抽出し検討した¹¹⁾。

彼の場合、第一に、ヘブリディーズ諸島における土壌の性質、耕作地の大きさな規模、海岸とか最寄りの港からの距離や地区の教会との考えられうる関係などを基準として考察され、また第二には古地図や昔の地代帳 (old rentals)などの断片的な文書などを手がかりとした。そして、ヘブリディーズ諸島における定住地名、中世とその後の地区名の起源を地図上にのせ、これを北欧語と Gaelic-Norse 地名が重点的に集中する5つの区域に分けて検討を加えたわけである。また、Olsen の考察の目新しさは、前述の *-setr* 農圃地名に加え、それと共にゲール語の変種である *airigh* / *airidh* に着目し、それが Old Norse に借用されたものとし、*-ærgi* に配慮したことであった。

そうすると、大多数の *-ærgi* 語尾の地名が二つの地域、即ち北ユーイスト島 (North Uist)から南へとむかうアウター・ヘブリディーズ (Outer Hebrides)諸島と、南スカイ島からキンタイア半島 (Kintyre)及びアラン島 (Arran)にかけてのインナー・ヘブリディーズ (Inner Hebrides)諸島にかけて存在し、ともにヴァイキング時代にあるノルウェー人の移住によって作り出された「定住地」名であることが新たに分かった¹²⁾。

11) David K. Olsen, 'Norse settlement in the Hebrides, an interdisciplinary study' (1983).

12) David K. Olsen, *ibid.*, by way of, Per Sveaas Andersen, "Norse settlement in the Hebrides: What happened to the natives and what happened to the Norse immigrants?", Ian Wood & Niel Lund (eds.), *People and Places in Northern Europe 500-1600* (The Boydell Press, 1990), p. 140. ただし、注目すべき点は以下のようなことである。即ち第一に、このような *ærgi* (*erg-*, *ary-*)地名は、その分布がギャロウエー (Galloway)とかカンブリア山地 (Cumbria), およびランカシャー、チエシャー、マン島といったところには及ばないが、その一方で第二に、この *ærgi* 地名がスコットランド半島の北海岸や北西部の海岸においても散見されることである。

ともあれ、これらのことから得られる一つの解釈は、ヘブリディーズ諸島への移動・定住者たちが、ヴァイキング時代の北西ノルウェー地方で最も共通していた *-setr* 地名を用いながら山岳地帯に特有な彼らの「夏季（羊）放牧経済」（= *shieling econmy*）などを展開していたのであろう、と考えられることなのである。ただし、*-ægri* 地名と *-setr* 地名との間に一体いかなる機能的な相違があったのかについては、地名学の研究としてまだ解明されてはいない。

Ⅲ. 小結

さて本稿の最後に、スコットランド西部・大西洋のアウター・ヘブリディーズ諸島でみられるいま一つの地名要素である *-bólstaðr* についてもいささか整理しておくことにする。

地名学者の指摘するところによると、この *bólstaðr* は、もともとゲール語が *bost*, *bus*, *bol(l)*, *bolks*, *poll*, *pool* といった形を選んで地名の要素に変形したもので、その一部は古ノルウェー語 (Old Norse) の *ból* (= *dwelling place*, *farm*)—注(9) 参照—に由来するのであるが、一体このタイプは地名としていかなる分布を特徴とするのであろうか。アンダセン (P. S. Andersen) によると、このような地名の分布は概ね *setr/ægri* タイプのものと類似していて、*-bost* 語尾地名のほとんどがヘブリディーズ諸島の北側でみられ、他方、*-bus*, *-boll/-bolks*, *-pol/-pool* といった要素をもつ地名はヘブリディーズ諸島の南の群島において優勢で、とりわけアイレイ (Islay) 島では *-bus* 地名が集中するという特徴があるわけである¹³⁾。

要するに、重要なことは複合語である *-bólstaðr* 地名のうち、あるも

13) Per Sveaas Anderson, *op. cit.*, in: Ian Wood & Niels Lund (eds.), *ibid.*, pp. 141-142.

のは Gaelic-Norse ハイブリッド (hybrids)へと変化していること、またあるものはノルウェー系定住地の訳語を示す純粋なゲール語地名に転換したり、さらに農圃地名の中にはゲール語を話す人々によって、シンプルで新しい地名に改められるものもあった、と考えられることなのである。

(1994. 7. 29)